令和６年度　学校経営報告書（自己評価）

学校番号	8	学 校 名	静岡県立沼津特別支援学校伊豆田方分校	校 長 名	青木　暁乃

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安全	人権に配慮した指導の徹底	・職員や生徒が、互いの良さや苦手を認め、寄り添う姿勢や称賛の言葉を用いて関わっている。 ・生徒自身や保護者が、人権が尊重されていると感じている。	・人権尊重の視点での振り返りから、生徒同士では、互いの良さを認め合う意識が高まっている。一方で職員は、生徒への肯定的な関わり方について、さらに研修を積む必要性が確認された。 ・人権尊重の視点での振り返りから職員と生徒にそうは思わないという回答が一定数あった。	B	・職員が全ての生徒に対して肯定的な意識を持って関わる重要性を確認し、個に応じて寄り添う姿勢や称賛の言葉を用いた柔軟な関わり方の追求に徹底して取り組む。 ・職員と生徒共に、挨拶を交わし合う姿が、日常的に見られ相手を尊重する意識は高まった部分はあったが、「さん」付けの励行については今後も徹底できるようにする。
安全	**誰もが安心して通える学校**	・校内の情報や物品がシンプルに機能的に整理されている。 ・調整や工夫により、教室や特別教室が有効に活用されている。	・パソコン室や更衣室等の共有スペースの物品整理が進んで安全や機能性が高まったが、継続した整理が必要である。 ・少ない活動スペースの中でも教務課を中心に調整、学部内でも融通し合い有効に活用された。	B	・機密文書を含む共有データの整理については全職員で意識的に取り組むことができている。掲示環境ついては、より教育効果の上がる掲示計画を検討していく。 ・現在の使用教室の中での細かい調整を継続しながら有効な活用を進める。一方で、更に機能的な有効活用を進めるために、室内の備品等の整理を継続する。
専門	生徒との対話を通した教育的ニーズの把握	・生徒自身が自分の得意や苦手を知り、生活の中で活かしている。 ・作業学習をはじめとする学習場面において、生徒が自分の得意を活かし、主体となって活躍している。	・生徒の１月の評価では、9 月から「自分の得意なことや苦手なことを知り生活の中で活かしている」という生徒が 16％増えている。一方で、個々の実態に応じた自己理解の指導の工夫の必要性を感じる職員の評価も一定数見られた。 ・生徒自身が得意を生かして主体的に活動しているという職員の評価が多く見られたが、生徒の評価では「学校で勉強することが楽しくない」と答える生徒が 11％見られた。	B	・各学年の授業の中で、お互いの考えを知る機会を多く設定することで、自分の良さや苦手に気付き自分の課題に前向きに取り組む生徒が見られた。さらに、生徒自身が、自分のことを理解して自信をもって生活できるような授業づくりに取り組んでいく。 ・集団の中で自分の得意やよさに目を向けて主体的に授業に取り組む生徒が増えた。その中で教員は、更に、実態差に応じた個への指導・支援について研修を深め、すべての生徒の主体的な姿を引き出していく。

専門	**個に応じた適切な進路決定**	・生徒が、勤労観や職業適性について理解を進めている。 ・保護者が、進路選択や職場実習の価値を重視し、協働している。	・全職員は、キャリアパスポートの活用等を通して自己理解が進んだと評価した。生徒の１月の評価では、９月から「学習を通して自分に合った働き方についてイメージできている」と答えた生徒が 11%増えている。 ・職員の評価においては保護者の３年間の進路選択の流れや子どもの適性について理解を促す必要性を感じる職員が一定数見られた。	B	・各学年の実態に応じたキャリアパスポートを活用することで生徒自身が自分の適性について知り将来の生活を考えることにつなげる姿が多く見られた。今後３年間のつながりを踏まえた活用を検討していく。 ・進路選択の進め方や職場実習の意義についての保護者の理解を進める３年間の流れを、職員間で共通理解した上で、保護者に伝え、生徒の適性や思いに沿った進路決定が連携してできるようにしたい。
連携	**関係諸機関とのつながりを大切にした切れ目のない支援と指導**	・職員が、生徒や保護者のニーズを把握し、必要に応じて面談や関係者会議を実施している。 ・保護者が、生活安定や地域安全の価値を重視し、支援している。	・全ての職員において必要に応じて適切な面談や関係者会議を組んで進めることができたという評価であった。 ・支援が必要になった場面では、事実確認を迅速かつ的確に行い保護者と共有をすることができた。難しいケースもあったがケース会議は柔軟かつ組織的に実施することができた。	A	・各学年で個々の生徒の現状を細かく分析して、必要に応じて学校内及び関係機関と共有し、チームで課題解決に向けて取り組むことができた。さらに、学校内での情報共有の迅速化を図る工夫をする。 ・各学年で家庭とのやりとりを丁寧に行い、信頼関係を保つ中で、生徒や家庭の支援に取り組むことができた。各学年に支援が必要な生徒がいるため、保護者と連携した生徒の見届け等の支援を含め、継続して丁寧に対応していく。
連携	生徒の自立と輝きに向けた共生・共育の充実	・生徒が、田方農業高校との共同学習や行事をはじめ、外部人材との交流学習に積極的に参加している。 ・学校運営協議会と教職員とが、相互に連動している。	・全ての保護者・職員は生徒が主体的に参加することができていると評価している。生徒の評価においては 97%が「楽しい」と回答している。 ・夏の研修会を通して、学校運営協議会委員と協働して学校と地域のつながりについて地域に発信できた。	A	・生徒が共同学習において、田農生と意欲的に学んでいる。関わりが苦手な生徒においても回を重ねるごとに共同で学ぶことに前向きになる姿が見られた。今後も、作業学習や総合的な探究の時間としての確かな学びの成果が出るように田方農業高校と授業作りをしていく。 ・学校運営協議会の委員の方の支援を受けて研修会を開催したことで、在校生や卒業生が地域とつながりをもって生き生きと自分らしく生活するための支援者を増やすきっかけをつくることができた。
チーム	**チームとしてやりがいのある職場**	・教職員が、チームとしての成長を実感している。 ・職員が、本校事務室からの連絡を適時に確認し、連携している。	・チームとして全ての教職員がお互いの考えや思いを十分に伝え合う状況には至っていない。 ・職員は管理職と相談しながら事務室と連携して業務を進めることができていた。	B	・グループワークで教職員が自分の取り組みについて、お互いに情報交換したり、認め合ったりする機会を効果的に設定する。 ・職員が各担当する役割の中で事務室とのやりとりを適時に行い、スムーズに連携しながら仕事を進めることができた。